

自賀

米の春こそとまた有としの坂
幾春をかさねる松や老の友
彦はえもさそふて戦く柳かな

其 柳
男 其 桃
孫 清 玉

老父の賀章た、に机にのみおかんも
本意なきものから後をしのふの咄し
くさにもと四方の秀調をもともに
梓にちりはめてしたしみの深きを
願ふになん

いつとなく日数かさねて笑ふ山

渭川

癸亥春

鷗波書



②5 新年摺

御降も神のそはえや松か崎

梅 通

飲て出た酒もほんのり野のかすみ

淡 節

うめか、にはしりつきけり向ふ風

波 同

鶯の来て引出すや野のみとり

鳥 岳

うら白や敷もかさるも遣ひはれ

文 海

飼鶴のふりむきもせぬ初日かな

も ち

幹はまたくらき夜明の柳かな

素 屋

雨たれをよける葉もある椿かな

潮 水

船見えて沖へもかよふ小てふ哉

昇 左

暮々や水田にしろき梅の影

梅 裡

つみなから松葉をふるふ若菜哉

一 清

田の水にうつるものなし夕霞

流 翠

のりそめやひと嘶きは既のうち

羽 洲

渦をまく水やこまかに春の雨

士 前

このころの眼にふれやすき柳かな

完 伍

笹く、り来るやすらぐ春の水

嵐 牛

日々咲てへらぬ蒼やうめの花

青 溪

夕空をふつくり冠る柳かな

月 杵

元日や誰も来ぬ間の茶一ふく

他 山

呵り人のいねは折れす梅の花

可 候

山ひとつあらひ出してはるの雨

喜 年

元日の男ふりなりすまひ取

栞 堂

金屏のにらみにおけや福寿草

乙 瓢

日のかげの広うひろかる柳かな

篠 呂

早寐するほどに日もへて松の内

巢 傾

水鳥の初日に向てなかけり

潮 産

さし鳴て行先見ゆる夜明哉

多 代

黄鳥や隙な身ほとに聞おくれ

風 止

さ、波をたて、はぬるむ水田かな

此 一

去年ついた堤にもさくすみれ哉

文 貞

うくひすや飛々まじる瓦屋根

山 方

呼接の枝のさきなり虫の壳

鷺 眠

初そらや左右へちり行峰の雲

素 山

万歳や親子はなしに里わたり

大 夢

くもる日は猶香の深しうめ林

左 一

降あかる雨の間もなう霞かな

哲 外

しの、めや霞むかたよりわたる風

完 鷗

落ついた嘶うつりや春の雪

正 仰

年礼も只一日の小村かな

涼 花

山もとや柴おく洞にうめの花

溪 齋

蓬萊にひと膝す、む会釈哉

卓 郎

咲たれはそれも梅なり宮柱

等 栽

はつ霞たつや思うた処より

芳 草

晴きらぬ月も又よし梅柳

草 友

啼わたる鳥や海より明の春

草 甫

雨気もつ鐘や雉なく桐島

ト 早

しる家の前も通りて吉方哉

波 鷗

空近う思ふ向ふのやなきかな

苴 磨

万歳の下戸めつらしう思ひけり

伴 夢

門松にあるしは留主か宵月夜

蘆 城

てらくと日の影うつる柳かな

可 尊

梅さくや棹さして見る池の舟

留 木

黄鳥や聞人ありと思ふふり

鼓 汀

三日月は消て地声の蛙かな

呂 風

枝ふりは接木の後の工風哉

只 青

うくひすや雪吹ちらす日和風

五 休

鶯の音に春の日のうつり哉

稔 布

水靄に枝先うつむ柳かな

蘭 操

ころ柿の齒にしむ朝や梅の花

思 樂

風てから薄う日のさす柳かな

永 年